

夜の学校っていうと群青色の影と月や街灯の光がうまく分かれて住んでいるようなイメージが強い。けど私達が侵入した校長室は窓もガラス付きの扉もないから全然そんなにきれいなものじゃなくて、私の後ろでちょっと高価そうな扉が閉まったらもう本当に一寸先だって見えないう真つ暗闇だった。

鍵が閉まったのを念入りに確認してから右手に持った大ぶりの懐中電灯のスイッチを入れる。絨毯に直径一メートルのクリーム色した円がうすぼんやりと描かれて、仙ちゃんが小さくしゃっくりみたいな声を上げた。こんなんでいちいちビビっちゃ駄目よう。

一方の五月は動じた素振りも見せずに鍵の束をポケットに閉まった。と思う。見えないからわからない。とりあえず密室は確保されたみたいなので懐中電灯を少しずつ上に向けて行く。と、幅広い机の凹凸やその上に乗った黒いペン立てとボールペンと、奥にこれまた黒い革張りの椅子が順々に浮かび上がる。見事なくらいの校長室らしさ。そして天井のすぐ下には額縁に入ったありがたい校訓が三つ並んでいた。

『一、誰にも恥じない行動をとること』

五月が読み上げつつ鼻で笑う。

「わたしら全然守れてないね」

違うよ。

言いかけてやめる。確かにこんな夜中、ピッキングまでして校長室に入り込むのは人に恥じない行動じゃないかもしれないけど、一番恥じ入っちゃうような事をしたのはその校長大先生なんだから。

「安田アッ！」

私は叫んでから校長を睨みつけて、少し迷ってから階段の下でうめく安田の元へ駆け寄った。時は高校二年の六月初頭、辛気くさい低気圧が首都圏まで張り出して私のやる気を根こそぎにする季節である。

右足の脛辺りを押さえてる安田は顔面蒼白にして言葉にならない言葉をぶつぶつぶやいている。もしかしたらおまじないなのかもしれないし、単に気を散らすために意味の無いことを言っているだけなのかもしれない。円周率とか。それはともかく放っておいたら死にそうだ。ストレートヘアが床のタイルに広がって、その中で形の良い三白眼と艶っぽい唇が苦しそうに歪んでいる。足は膝とくるぶしの丁度中間辺りで不自然にやわらかく曲がっていかにも痛そうな様相だった。とにかく保健室。私は冷静を装って再び叫ぶ。

「誰か豊田先生呼んできて！」

階段の上では兄貴が校長の前に立ちただかって、くぐもった声で何か話しかけている。ああ

いう時の兄貴は危険だ。相手が目上だろうとグラップラーだろうと必殺の顔面膝蹴りをかましかねないオーラが上半身から立ち上る。そんなことになったら気分はいいけど退学確実だからどうしよう。校長は校長で威厳を保つためだかなんだか下目遣いをやめずに真ん中ハゲの頭頂にまで皺を寄せて、憤怒の形相を浮かべたまま兄貴の眼力と真つ向勝負を練り広げている。大惨事の予感がしてきます。

そうやって私が安田の手を握りつつ上の様子もうかがいつつどっちを取るべきか悩んでいると、いいタイミングで五月が二人の間に入ってくれた。いつもながらあまりにソツがなくて、ついつい転げ回りたくなる。いざって時の五月様だ。

五月に何か言われて押し留められている間に校長はどこかへ逃げようとするからそれでまた兄貴が激怒して五月が必死になだめて、それを三回繰り返してやっと校長は逃げ去り、兄貴は五月に文句と礼を言ってからこっちに降りてきて、それから仙ちゃんが保健室の主を連れてきた。私の可愛い仙ちゃん！ 私は安田の手を放り出して仙ちゃんに抱きついたり切り揃えられたショートカットをわしわし撫で回しそうになるのを何とか抑えて、それを感じ取ったのか安田の口元が一瞬苦笑気味に歪み、それからまたすぐ痛みの表情に戻る。

先生は一瞬で現状を把握すると適切な応急処置を施して、近くで呆然としていた生徒を使って安田を保健室まで運ばせる段取りを整えるやポケットからロリポップを取り出し大儀そうに口にした。

「安田の足！」

「命に別状はありません」

「そんなんわかるけど」

「なら心配いりません」

「でも心配なんだよ！」

先生は私の肩にどかんと手を置いた。

「死ななきゃ治る。骨は折れたら付く。そういうもんだよ」

それでも言い返せなくなる。

「あなたの気持ちの責任も私がとってやる。校長もただじゃ済まさない。だから、後は任せて教室に戻んなさい」感情を押し殺したような目で言いつつポケットから新しいロリポップ。

「飴あげるから」

結局、安田は先生の車で信頼出来るっていう病院に搬送されてそのまま入院、私と仙ちゃんと五月と兄貴は元の生活に戻された。けど、私はそれからもやもやを無い胸いっぱい抱え込むことになった。安田は骨を折って半月近くも高校から引き離されることになり、その原因はどうあろうと校長にある。

校長、わざと押したんじゃないの？

私はどう頑張っても疑念を振り払えない。何しろ校長は兵隊上がりの將軍気取りだし、安田

はそんな校長の態度が気に入らないのか顔を見るたび歯向かっていたし、事故の前だって何か言い争っていた。最悪わざとじゃないにしても、弾みで突き飛ばしたくらいの可能性はなきにしもあらず。

「だってらわざとと同じだ。」

「そんなちよつとショートしちゃったような理由で、元々高圧的な校長が嫌いだった私は個人的感情も含めて復讐すると軽く決めた。やっぱり自分の気持ちの責任は自分でとらなければいけない。」

「ただし一人じゃ何もできないこの今岡志穂、きっちり助けはいただきます。最強の兄貴と頼れる相棒五月。三人寄れば文殊の知恵じゃないけど、誰も停学や退学にならないやり方で安田の仇を討つ。そこで私の怒りを収めるべき所に放り込むのだ。そういうやり方が、きつとある。」

「もちろん、いきなり校長室の扉ぶち破ってカサカサの礫砂漠みたいな顔面にストレートなんてことを考えた訳じゃない。退学になるから。まずは兄貴の部屋で作戦会議を致しましょう。」

「合法的に殺せたりしないの、あれ」

「殺すな。くだらねえからやめとけて。仇討ちとか今時なしだろ」兄貴は言う。一番切れるくせに時間が経つと妙に落ち着いてしまうのが兄貴の悪い所だと思う。校長が逃げたんで冷めちゃったのかもね。

「そうそう、あんま派手にやっちゃって安田にばれたら嫌がられるかもよ」と五月。痛い所を突かれて私は黙る。うつむく。そりや安田は望んでいないだろうし。

五月の言葉に反応して兄貴が何度も頷く。何時もいいこと言うよなんて感心せんばかりの頷き加減。この二人は何かにつけて足並みが揃う。何だよ、出来てんのか。いや五月には彼氏が。

「それじゃ校長襲うのはやめる」

「当たり前だつつかお前そんな事する気あったの」

「ないけど」

「なんだよ」

「でもやるんでしょ」五月が口を挟んだのに合わせて相槌を打ち、それを横から見ている兄貴はしようがねえなつて顔をする。

二人とも私を分かっている。本気でやる時とやらない時は声も目線も頷く角度も違って、今は勢いじゃなく本気でやると言っているんだってちゃんと読み取ってくれている。こういうのをふとやられると、それだけで満足しちゃいそうなくらい嬉しい。

「でもやる」

「でもって何だ」

「でもでもやる。校長やるの無しなら校舎とかでいいから」

「志穂、ピンポイントじゃなきゃ駄目。あちこちやったって校長も誰も怖がらないよ。尾崎じゃないんだから」

兄貴が嫌そうな顔で呻いた。この隠れ尾崎ファンめ。

「んじゃ校長室？」と、口に出してから納得した。

そう、校長室。やるなら校長室だ。あの化石軍人の弱みを何とか見つけ出すか大事な物を握りつぶして思い知らせてやらないといけない。決して校長に絡まない人にまで危害を加えちゃいけない。そしたら私達はホームレス小屋をぶっ壊しちゃうような奴等と変わらなくなる。

二人が一旦沈黙する。

「校長室！」私は繰り返す。

決めました。あとは二人が賛成してくれるかどうか。嫌だって言われたらどうしよう。一人じゃ絶対失敗するに決まってる。最低どっちか助けて欲しい。空気が張りつめているのか重くなっているのかよく分からなくて手に汗がにじんで段々耐えきれない気持ちが大きくなってくる。兄貴、何遠い目してんの。嫌ならいいからもう一度やめろって言ってよ。そしたらやめる口実が出来るから。いや何考えてんの駄目駄目まだ我慢。

「夜かなあ」満を持して五月が言った。ぼつり。

「夜しかねえな」兄貴が独り言なのか返事なのか判別できない口調で続ける。

「そうそう夜だよ。夜？」

「ぼかんとしているだろう私の顔に向かって五月が論すように語りかけて来る。

「昼は無理だよ、さすがに。昼行こうとか思っただけだよ」

「うん、ヨルヨル」脊髄反射で返事をしたせいかイントネーションがおかしい。

そりゃそうだね。白昼堂々校長室に忍び込んで机とか本棚とか額縁ひっくり返して誰にも見つけられぬなんて考えてみるまでもなく明らかに無理がある。

それはいいけど夜中どうやって校舎に入るのよ。あ、そうだ。

「兄貴、合鍵とか持ってるんだっけ」

「そんなもんあるかよ」

「でもしよっちゅう忍び込んでたじゃん」

「三回だけだ。しよっちゅうじゃねえ。体育館の裏に鍵閉まらない窓がいくつかあるんだよ。教えてやるからそこから入れ」

さすがは偉大なお兄様。成績優秀体力抜群そのくせ停学無駄に三週間の健康優良退学寸前少年。口は悪いけど頼りになります。それはいいけど最後の言い回しが気にかかる。

「兄貴着いて来てくれないの」

「行くかバカ野郎。お前も一緒なんだから」と、五月の方に向き直る。

「うん、わたしは行く。でも一応電話は出られるようにしといて欲しいなあ」五月は兄貴にせ

がみつつ横目で私を見る。

「欲しいなあ」五月の真似して上目遣いでねだる。気色悪いよ。

「わーかったって」

「イエア。そんなじゃ何か問題とかあるかなっていうか校長室の鍵とかどうすんの」

「お前が聞くなつての」

「わたしが開けられると思うよ」

五月はすごい。いつも私の無計画の無を吹き飛ばしてくれてありがとう。

「で、一応聞いとくけど何も見つからなかったらどうすんだ。俺は多分そっちの可能性の大きいと思うんだけどな」

う。

兄貴は痛い所を容赦なく突いてくる。けど、わたしは一旦弱ったような表情を見せるもの。すぐさま強気な態度に戻って兄貴の顔をビシッ指差してやる。

「荒らす！ 校長だけがビビるような荒らし方して、それ以外何もしないで帰ってくる！」

「ほほう」と、兄貴は分かったような顔をこっちに向けてきた。ああこいつ私が結局何も出来ずに帰って来ると思ってたやがる。どうしよう。何かそんな気もしないではないけどやられっぱなしはしゃくに障る。

「それでいいと思うよ。人の顔真っ青にするような荒らし方、わたし知ってるし」五月のありがたい助け舟。頼りにしています。

「お前、ほんとそういうのよく知ってるよな」

「慣れてるからね」

慣れてるってのもどうなのよ。まあとにかく駒は全部揃ったみたい。

「じゃ、明日！ 金曜だし！」

「いいよ」

「せいぜい頑張れ。何があっても俺の名前出すなよ。退学になんだから」

「わかってるって。私と五月のコンビで十分よ。お任せあれ」

「お任せあれ」

「そんなじゃ明日行くよ！」

そう言った瞬間私は強烈なプレッシャーに捕われて身体が硬直しそうになる。本当にやるんだ。仇討ちぶっちゃって冗談じゃなく学校忍び込んで校長室の扉ピッキングして机の中とか調べちゃうんだ。そんなのもう安田のためとか言えない。私の私による私のための反体制。五月まで巻き込んだじゃって、何かあったら謝るくらいじゃ済まないかも。

でもでもでも、やる。私は私のわがままで安田を苦しめた校長に一発喰らわせてやりたい。私を堪え難い所まで怒らせたあのハゲに。的に狙いはついたし弦はもう指先を離れる所で、今からやめようとしたら矢は行き所がなくなって他の誰かを傷つけるに違いない。私、じゃなく

て私達はもう校長室を襲撃するしかないんだ。

よし！と私は空元気を振り絞って勢い良く二人と手を打ち合わせる。超恐い。

黒塗りの空気を切り裂いて懐中電灯の光が踊っている。わたしのと五月のと、五月が予備で持ってきた小さいやつを仙ちゃんが振り回しているの。光の通り道には細かい塵とか糸くずが隙間無く舞っていて、もしかしたら懐中電灯じゃなくてこの細かいのが道の形になるよう打ち合わせして光っているんじゃないかって思えたりもする。手首を返して光を天井へ向ける。おいそっち行くぞはいはい任せてなんて言ったりして。光る役の受け渡し。

それはいいとして校長が吐き出したかもしれない空気なんか一息分も吸いたくない。

わたしの光に仙ちゃんのが重なる。右へ振ると右へ、意表をついて下ろすと慌てて後からついてくる。テレビでたまにやってる草食動物の親子みたい。微笑ましいなあ。

じゃなくて。

「仙ちゃん」

「えーごめん、だつてえ」とか仙ちゃんはちよつと申し訳無さそうに言いながら笑う。ああメイドとか妹とか叫んでるオタクってこんな気持ちなのかしら。それじゃわたしも仙ちゃんオタクだ。

それにしても校長室はやたらと居心地が悪い。その理由はきつと窓が一つもないからだ。一応校庭に面しているのにそちら側は塗り固められた一面の壁と古臭いスチール本棚と校訓の額縁に覆われて光のひの字も通さないくらいだし、職員室へ繋がっている扉も入口と同じく全面木張りで取りつく島も無い感じがする。特に壁の方は、死体でも埋まっていそうな不気味さ。丸一日こんな場所において息が詰まったりしないだろうか。いや、詰まっているのかも。だからしよつちゆう外に出て授業の様子を見たり生徒に絡んだりするんだ。いい迷惑。教室にクーラー設置とか後回しにしていから校長室に窓つけて、それですつと外に出て来ないで欲しい。

五月が興味深そうに、職員室側の壁の上を右から左へなめるようにゆっくり照らしている。

一面に額縁入りの爺ちゃん婆ちゃんの写真が並んでいるのは、遺影？

いやもちろんそんな事はなくて、歴代校長の写真だった。と言ってもみんな校長だけあって結構年がいつているし、昔の方になると白黒だったり角がちよつと焼けたりしてこの世からちよつと離れた感じもする。大体初代とか本当にこの世にいないんだから、遺影って言えば遺影かもしれない。

「五月ちゃん、恐いよう。やめよ？」

「あ、ごめん」

事も無げに五月は答えるけど仙ちゃんは本当に怖そうにしている。確かにこれ、夜に見たら怖いよなあと思ふ。ていうか今、夜じゃん。何だか私まで怖くなってきた。やばいやばい

やばい。五月やめてよ。やめてとか言いたいけど何となく言い辛い。何故なら私は一応りーダーだから。

「一応聞くけど、ここからどうするか決めて来た？」

五月の懐中電灯が私の胸辺りを差して、何だか取り調べを受けてるみたいな気分になる。仙ちゃんは興味津々といった眼差しをくれる。何だよ、私また考え無しにここまで来ちゃったと思われてんのか。でも入口は兄貴が教えてくれたし扉の鍵は五月様のピッキングだし、私が決めたのは実行するってことだけなのだ。そう思われてしまっても仕方ない。

しかし。

「ん、引出し。ていうかそこしかないでしょ」

私は得意げに聞こえないよう出来るだけ抑えた口調で返事した。どうですかこの計画。あれ、でもそこくらいしかないって誰でもわかるか。それじゃやっぱり考えなしかも。

「志穂ちゃんすごいねえ。ちゃんと考えてるんだ。あたし、片っ端から壊しちゃうのかと思ってたよ」

何か仙ちゃんが私を誤解している。

「わたしも最初はそう思ってた。そんじゃまたピッキングマシンの出番かしら」

「ひでー。私、何か暴力女みたいじゃん」

五月が可笑しそうに笑ってやたら年季の入った校長机の後ろに回り込んで重そうな椅子を引いて、丈の長い絨毯が引つ搔かれたような音を立てて押しつぶされる。老絨毯は何年も何十年もそんなのを繰り返されてきたせいかな、椅子の周りだけハゲかミステリーサークルみたいになっている。

仙ちゃんと一緒に懐中電灯を振ると、鍵穴はすぐに見つかった。普通の安い、ディスク式シンダーっていうんだっけ、五月曰く「あっさり開くやつ」。五月は時々恐ろしい事をあつさり言ってるのけるから格好良い。

「これならすぐかな。つつか古くて中見辛い。どっちか鍵穴の正面から照らしてくれると嬉しんだけど」

「あ、あたしやるよう」

「ありがとう。そんじゃボスはのんびり座っててくれてかまいませんことよ」

誰がボスだっつうの。

「他に何か弱みになりそうな物とかあるかもしれないし、探してみる」

そう言った瞬間、ジーンズのお尻ポケットに入れたいた携帯が震えて電子音が鳴り出した。慌てて取り出して電源切っちゃおうとしてやっぱり踏みとどまる。ファウンテンズオブ何とかのサビ。兄貴だ！

五月もそれに気付いたのか、目を細めてこつちを見る。仕方ないから私は携帯を開いて通話ボタンを押した。

「何こんな時間に」

小声でとんちんかんな応答をしてしまう自分が憎い。

「何言ってるのお前。もう校長室入ったのかよ」

「入ってる。ビビるからいきなり電話して来ないでよ！ 着メロ警備員に聞こえたらどうすんのよ」

「バカ野郎、マナーモードにしとけよ！ 不法侵入にマナーモードは基本だろうが」

「知らないよそんなこと！ ていうか本当に何」

「いや何ってこともないんだけど」

「ちよつとさ、ほんとやめてよそういうの。仙ちゃんもビビってたんだから」

「ああ？ 何で仙田がいんだよ」

あ、もしかして余計なこと言っちゃったかしら。

「ほら、成り行きで」

電話の向こうから舌打ちが聞こえた。

「お前な、慎重にやれって何度も言ったのにな」

「あーもうあとで説明するから、今忙しいから切るよ！」

「つたくもう。無理すんなよ」

ささっと通話を切って、言われた通りマナーモードにセットした。一応忠告は聞いておかないとね。

「何の用だった？」

「何か頑張れって言いたいだけだったみたい」

「心配性なんだね、五月ちゃんのお兄ちゃん」

五月が吹き出す。ほんと笑うしかありません。まだ光っている液晶とその先にある手をじつと眺めてしまう。指紋対策の白い手袋がやけに生々しく見えて自分が犯罪者な気分になってきて、少しテンションが落ちる。何だよもう。

仙ちゃんを連れてくることになったのはもちろん偶然の産物で私達の本意ではありません。

そんなことを言ってみても事実は変わらないし、どうにかするしかなかったんだから後悔も出来ないけど。

話は十分くらい巻き戻る。

兄貴のしつこいくらいの忠告もあって私と五月は慎重に、それは慎重に学校までのルートを選び抜いた。兄貴が教えてくれたのもあったけど、それだとまだ人に見つかる可能性があるかもしれないと疑いに疑って、更に誰も出くわさなさそうなのを。出来るだけ暗くて狭くて、そのうえ人が通っても気付かないような道じゃないと駄目。普段だったら絶対に辿りたくないようなルートになっちゃうのは我慢しなければいけない。目的達成のためならどんな苦労もい

とわない女、今岡志穂。

大通りも通学路も迂回して、幽霊屋敷呼ばわりされてる空き家があったり何でか庭に植えてあるシュロの木が道に張り出してトンネルみたいになっていたりする危なっかしい小道を抜けると学校の裏に出る。道の奥に時計塔がそっぽを向いて立っているのを見つける辺りから不法侵入ムードが嫌が応にも高まってくる。ああこれから私は奴等の隙を突いて校長室に忍び込むんだ。何だか感慨深い。

で、校舎もう一ブロックっていう四つ角の脇に差し掛かったところで仙ちゃん。

いっぺん死のうかと思つた。

だつて人に見つかっちゃいけないって散々注意を払つていつも使つてる道は避けて、出来るだけ車とか通らないような細くて暗い道を選んだのに。実はそういう道使うの結構恐かつたのに。もうちょいで学校だつたのに。何でか仙ちゃんつてば偶然角から出てきてしまうんだもの。どうしたこと。運命か。

しかし中学時代にバドミントンで鍛えられまくつた私の反射神経はそんな事を考える間もなく、今にも志穂とか五月とか発しちやいそうなあの小さい口をさつと塞いでしまう。端から見れば拉致とかリンチとか思われそうな光景だ。実際その場から学校まで半ば引きずつて行つたのを考えれば軽い拉致つて言えるかもしれない。犬とか家族とか連れていなくて良かった良かった。ただジャージ姿はいただけじゃない。

メッシュになつていているんじゃないかつてくらい軽い仙ちゃんの身体を半ば引きずりながら、私と五月はアイコンタクトをとりまくつた。いざとなれば言葉なんか無くてもコミュニケーションとるくらい全然余裕。私はさながら工藤静香の化身つていうかそれはあまりに古いからやめよう。いいのがあんまり思いつかない。とにかく視線とか仕草で意思の疎通を図つて、とりあえず連れて行くことに決める。

「どうしようやばい」

「落ち着きなつて。とりあえず学校連れてつちやわないと」

五月がきつい視線を返してくる。薄闇の中でセミロングの髪が踊る。五月は本当にこざつぱりとした顔だ。そのくせ印象が薄い訳でもなくて、何て言うかユニセックスを顔で表現しているような、誰が見ても好感を持たざるを得ない力が潜んでいる。彼氏がいるのにモテるのがよく分かる。私にもああいう魅力があつたら仙ちゃんを惹き付けられるのかな。

なんて思いとは関係なしに無言のやり取りは続く。

「でもそこまで行つたら追い帰すわけにいかないじゃん」

「帰せそうならわたしが理屈つけてあんたが言いくるめるの」空いた手を口元にやってバクバク。

「行きたいつて言つたら――」

「手袋も懐中電灯も予備あるから任せて！」得意げにトートバッグをポンと叩く女。

予備って。

何で予備の手袋とか色々持ってきてるのか混乱しちゃってよく分からないながら、他にいい案も思い浮かばないから私はとにかく頷いて恐がる仙ちゃんをなだめて歩かせて、何とか他の誰にも見つからずに学校まで辿り着いた。実は仙ちゃんとも打ち合わせしてて遭遇したのも偶然じゃなくて、何か私の知らない陰謀が渦巻いていたり誰かが誰かを陥れようとしているんじゃないかと思ったりもしちゃって私はあつという間に疑心暗鬼になって、でもすぐに立ち直る。切り替え早いのが私の長所だ。

夜の校舎は中に脳みその詰まってない空っぽの頭蓋骨みたいに見える。廊下の非常灯だけが所々で光っているから辛うじて生きているってわかるんだけど、動いたり考えたりしている中身が全員それぞれの家に帰っちゃって自分じゃ何もできない硬いだけの入れ物。まるで真冬の海の家。見ているだけで気分を萎えさせる。

私と五月は結局仙ちゃんを言いくるめて、体育館の壊れた窓から校舎に侵入することにした。連れて来てしまった以上それしか方法はなかったと言えそう。人生ってままならない。ああ。

靴に布袋をかぶせてそろそろと壊れた窓を開けて、誰もいない体育館に侵入する。続いて仙ちゃんと五月。五月が後ろ手に窓を閉めて、これでもう後には引けない。仙ちゃん、巻き込んじゃってごめんね。でもそんな簡単に言いくるめられちゃ駄目。

「やばい、人来る！」私は出来るだけ小さな声で二人に告げた。

「ほんと？」と仙ちゃん。

「足音聞えないから大丈夫なんじゃないの」五月は鍵開けに没頭中で、返事も上の空気味だった。

だが来るのだ。私の嫌な予感は今宵も冴え渡っている。まだ足跡も気配もないけど、多分今しがた警備員が宿直室の扉を開けてこっちに向かい始めているところに違いない。こういう時の直感が外れた試しはないから絶対にそう。暗闇の中で研ぎすまされた感覚は、あと五分かからず警備員が校長室の扉に辿り着くって最大ボリュームで叫んでいる。

「来るよ。間違いない」

「まだ早いと思うんだけどなあ」と、五月が携帯を取り出してこっちに見せてくる。午後十時十五分。巡回には早い時間だったのは確かだ。

「とりあえず私の虫の知らせを信じて！何か出してよウカえもん！」

五月は名字をウカイという。烏に飼でウカイ。

「誰がえもんだったの」

「トリカえもんよかいいじゃん」

「まあね。仙ちゃんちよつと鞆照らしてくれる？」

「はい」

仙ちゃんが手を挙げて指示に従うと、五月は何やらゴソゴソとトートバッグの中身を探り出し、それから何かに気付いた様子で顔を上げ、遠くを見つめるような表情になった。

「あー」と気の抜けたような声。「トリカえもんってのは初めて聞いたわ」

五月は、鳥にコンプレックスでもあるのか名前の呼び間違いを極端に嫌っている。

小学生の頃は、教師にしょっちゅうトリカイと間違われては切れそうな震え声で訂正を繰り返していた。教師以外の大人も認識は似たようなもので、二人で友達の家遊びに行った時に親御さんから自分だけ正しい呼び方をさねずに黙り込んだりそのまま逃げ帰ったり、今では考えられない気弱な面が遠慮なく表に出て来ていたのをよく覚えている。

確か、私が名前で呼ぶようになったのもその頃だったと思う。元来た道を半泣きで戻る五月の手を握り、勇気を振り絞って呼びかけたらぎこちない調子で私の名前を呼び返してくれたんだ。

もちろん、大人だけじゃなく同級生達も五月を傷つけた。心ない男子からはひどくからかわれたりすることも多く、廊下の向こうからトリカイなんて大声が飛んで来ることもしばしば。最悪な奴は鳥の餌を五月の机にばらまいたりもした。

しかし、低学年の頃を泣いたり震えたりしながら過ごした五月は次第に我慢することをやめ、何時しかそいつらに対して必ず恐ろしい報復を仕掛けるようになった。五月が何でも出来るのはそういう半イジメみたいな経緯のおかげもある。ケガの功名っていうのか、男子への仕返しで万能少女になってきたのだ。それは例えばやたら精巧なおもちゃのナイフだったりロツカーのピッキングだったり警棒やロープや分銅の使い方だったりする。私はそういう所をありがたがっているけれど、五月にしてみればたまったもんじゃなかったに違いない。

時々、助けてあげられなかった負い目を感じることもある。

「志穂、投げるよ」

五月の言葉で私は我に返る。

「うん、よこして」

まず飛んで来たのは二十センチくらいの棒っ切れ。

「四角いボタン押してみて。自分に向けちゃ駄目よ」

言われた通りにボタンを押してみると、シャキーンって歯切れの良い音と共に棒切れが三段階に伸びた。

「何これ特殊警棒？」

「違うよ、デブも瞬殺の強力スタンガン。次ロープね」

五月が放ってきたロープの束を空いた手で受け取る。結構太くて重いロープだ。裁ちバサミ

でもそう簡単には切れそうにない。よし、何か五月の思想は分かりました。

「つまりスタンガンで気絶させてロープでふんじばるってことね」

「よく出来ました。扉の陰に隠れて、その警備員さんが開けたら手首の辺りにバチバチツてやってね。そしたらそいつで手と足縛り上げて猿ぐつわ嘯ませれば完成。あ、目隠しいるな」

「あ、あたしタオル持ってるよー」

「ナイス仙ちゃん」

何でタオルなんか持っているのかは別にして、ほんとナイス仙ちゃん。

「そんじゃ仙ちゃん、わたしの方はもう大体できて来てるから、懐中電灯椅子に固定してボスのほう手伝ってやってよ」

だから誰がボスだってんだよ。

仙ちゃんは、はあいつてまた可愛らしい返事をしてこっちに来る。仙ちゃんと共同作業だ。

嬉しいな。それどころじゃないのにつるつぺたな胸の高鳴りを抑え切れないバカな私がここにいる。

「ねえねえ志穂ちゃん、試し撃ちとかしてみなくてだいじよぶかな」

確かにそれはあるかもしれない。ぶつつけ本番なんて危険極まりない。いいこと言います仙ちゃんは。

「そだね。五月、これどうやんの」

「あーそーいや言うの忘れてた。根っ子にスイッチあるからそれオンにして、あとは丸いボタンで電気入るよ」

手軽ね。

「スタンガンでさ、普通は気絶なんかさせられないのよ。あんなのドラマや小説だけ。でもわたしのは別。調子乗って改造しまくったらすごいことになっちゃったんだわ」

そんな代物を五月は普通に持ってきているのだ。

「ほんと危ないから人に向けないようにね」

どうしろってのよ。

五月の指示通りスイッチを入れて、丸いボタンを押してみる。ジジジって甲高いクマゼミみたいな鳴き声を上げてスタンガン起動。青白い電気の輪っかが、延びた先から順に三ヶ所を小さく取り巻く。かすかに揺れながら棒というか刃に当たる部分の周りを囲むそれは科学が作った天使の輪って感じですがごく綺麗なのとは裏腹に、触れたら一撃必殺ものの危険極まりない凶器だ。

「きれいだねー」仙ちゃんが目を大きく開けて言う。

「触っちゃ駄目だよ」私と五月は同時に返す。

「触らないよう」

五月は薄く笑って作業に戻り、わたしはボタンから指を離す。仙ちゃんが言う通りのきれい

な輪は消えてなくなつて、校長室は再び懐中電灯の灯りしかない薄闇に戻る。

と、廊下の端から革靴らしき足音が聞えてきた。私の予感大当たり。当たらない方がいいに決まっているのに、自分の直感がちよつと誇らしくなる。もう一分もしたら警備員がやって来る。私達つてどうか私は、いざとなつたらそいつを迎撃しなきゃいけない。

私は扉を開けたらちようど死角になる辺りに移動する。懐中電灯は消して床に置いて、もう一度スタンガンの試し撃ち。ボタンを押したらまたもや美麗な電気の輪。早く人で実験したい気持ちになつてくる自分がちよつと怖い。仙ちゃんも私のすぐ後ろに立つて左手はロープの束とタオルを握りしめ、右手はわたしの袖口に添えてきた。それから唾を飲み込む。そんな音さえはつきり聞えてしまう闇。廊下からは警備員の無防備な足音がカッーンカッーンって規則正しく響いてくる。夜の魔力に引き延ばされて、音がいちいち長く聞える。段々と大きくなるその音に私の腕にも何だか力がこもってしまう。五月も作業を一時中断、机の下に潜り込んだみたい。

と、仙ちゃんがうめき声を上げた。

「どしたの？ 何かやばい？」私は言いながらスタンガンのボタンを押す。仙ちゃんの顔が青白く映し出される。

仙ちゃんは無言で自分の喉を指差して、必死に口を抑えている。さつき飲み込んだ唾が気管に入っちゃったのね。

「何してんの」と、低い声で五月。

「唾、喉」私は単語だけで答える。

「大丈夫だから咳しちやいなよ、仙ちゃん。手え当ててればバレないよ」
ほんとかよ。

五月の言葉に安心したのか仙ちゃんは無言で頷いて本当に小さな咳をいくつもする。コンコンと押さえつけられた声が私に向けられる。ああもう押し倒したくなっちゃう。我慢我慢。そういう場合じゃない。バレなきゃ警備員が素通りしてくれるかもしれない水際だつてのに、困っちゃうなもう。私はとりあえず空いた手で仙ちゃんの背中をさすつてやる。

そんなことをしている間に足音は二つ隣くらいまで近づいている。ただ、歩調が乱れていないから一応バレずに済んではいるみたい。どうかこのまま素通りしてくれませうように。

革靴の踵が床を打つ音は段々大きくなり、とうとう壁一枚隔てた所まで辿り着く。素通りして鍵開けないであつち行つて。私は力の限り祈る。仙ちゃんは少しうずくまって咳の残りを押しさえ込んでいる。五月は机の下に潜り込んで、多分ぼけつとしていてに違いない。

で、私の願いは空しく消えて、ドアノブに手がかかり、二度三度回されたかと思つたら鍵を差し込む音がそれに続く。嫌な予感はやっぱり圧勝だった。私は仕方なくスタンガンの準備をする。

何度か試行錯誤が続いたあと、濁りのない音がドアノブから飛び散つてゆつくりと扉が開け

られた。

まず差し入れられたのは懐中電灯。私達のより少し小振りなそれは持ち主の前方安全確認をするみたいにぎつと室内を一巡りする。もしかしたらさっきの咳が聞えていたのかもしれない。出来れば何も見つけたくないという感じでそろそろと当たり障りのない所を光は巡って、扉脇の私達までは届いて来ない。このまま上手くいけば――。

というところで光は椅子が引き出されたままになつてる校長机の所に止まった。詰めが甘いつてこういうことを言うんだ。私は心の中で舌打ちする。そのあと恐る恐るという感じで入ってきた手元目がけてスタンガンを振り下ろし、同時に丸ボタンを思い切り押した。

その途端、強力な静電気を思わせる破裂音と共に手首が跳ね上がって私は後ろに弾かれそうになるのをやつとこらえる。次いで懐中電灯が絨毯に落ちてやる気のない音を立てて、最後に警備員の身体がスローモーションで室内に倒れ込んで来た。

私は再度懐中電灯をつけて警備員の姿形を確認する。細身で大人しそうな初老の男で、口を半開きにしたままっ白目をむいて気絶しているみたい。軽く全身痙攣してるけど自分から動き出すような気配は見せない。

「上手く行つたみたいね」机から出てきた五月が訊いてくる。

「多分。これであと縛つちゃえばいいんだよね」

「そうそう。あ、あと気絶したらすぐ引つ込めた？ やりすぎると死んじゃうから気いつけて」

先に言え！

「元が古いやつだから、加減きかなくてわたしも難儀してんのよ」

「痙攣してるから大丈夫だと思っただけ」

「ならセーフ。引きずり込んで縛つちゃつて。仙ちゃんも咳していいよ」

「もう収まったよう」小さな咳を一つ。

それから私は警備員の身体を校長室に引きずり込んで手足を縛つてその間に仙ちゃんが目隠ししてよだれ垂れているのが汚いとか言いながら猿ぐつわ囁ませて、最後に扉を閉めて作業完了。それとほぼ同時に五月がよし、と声を上げる。

「開いたよ、ボス」

もういいわそれで。

ここで一旦、私の時間は止まる。もっと分かり易く言うなら時間の流れから弾き出されて独りぼっちになる。

小さい頃から時々同じようなことがあって、昔は何でそうなるのか全然分からなかったけれど、小学校の高学年辺りから何となくシチュエーションやタイミングが掴めるようになって来た。私が時間の外側に追いやられる時、それは『凍った時間』の中に住んでいる厄介者が私を

呼び出した時に他ならない。

『凍った時間』という名前は兄貴が付けてくれた。怖くてたまらなかったのに誰にも話せなくて、何度も何度も呼び出される内に生きていくだけでびくびくするようになって、それを察した兄貴が半ば強引に吐き出させたのだ。その後しばらくして五月にも打ち明けたから、私の秘密を知っているのは今の所二人。仙ちゃんと安田にもいずれ話すつもりではいて、でも引かれるのが怖くてなかなか切り出せずにいる。

一度に出て来る住人は多くてせいぜい三人かそこらというところ、今回は何でかやたら大勢で、しかも年寄りばかりの珍しい構成だった。地面から少し浮いた状態で私を睨みつけるおじいちゃんおばあちゃんの異様に少しだけ身がすくむ。と言っても身体動かないんだけど。

そいつらの顔は一樣に恨めしげな雰囲気をつたえている。これは住人の大半に共通する特徴だ。私がシンプルに「恨み」と名付けた嫌な空気は、世間で言うところの「未練」とか「怨恨」とか「哀切」なんてものだ。と中学一年で知った。ただ、そんな事どうでもいいの。問題はこの年になっても気軽に呼び出される点だから。いい加減他当たれど何度言っても聞く耳持たない住人は、的中率百パーセントの嫌な直感を凌ぐ、私最悪のオプシオンだ。

もう死んだんだから大人しく死んでよ。

すり切れたフレーズを住人達に投げかける。口は動かないから心の中で。もちろん聞いてはくれない。ただふわふわしながら私に鬱陶しい視線を送るだけの忌々しい奴ら。何だよ畜生！ 帰れ！ 帰る場所がなかったらどっか他探せ！ 私は五月と仙ちゃんと忙しくて幽霊なんか構って暇ないんだっての！

と、心中毒を吐いたところで私は住人の顔をどこかで見たことに気付く。そう思って必死に動かない視界を探ると、どれもこれもつい最近目にした人ばかり。

ああそう、遺影だよ遺影。みんな歴代校長の写真と同じ顔をしているんだ。てことは校長一同が校長室に縛られてどこにも行けないって訳か。何だよ。みんな揃って同じものにこだわっているの？ 全然分かんなくて私は意味もなく切れかける。指一本動かせないのが更に腹立たしい。五月がいればヒントくらい出そうなんなのに。でも五月は時間の向こう側で固まったままだし、やっぱり独りぼっちの私は自分で何とかするしかないのだ。

で、しばらく悩んではたと気付いた。私達が狙っている校長室の秘密がこいつらを縛り付けているんじゃないのかって。そして、気付いた瞬間年寄り連中は口ウソクみたいに吹き消されて『凍った時間』も元通りになった。

流れる時間の中に戻った私は死ぬ寸前まで息を止めていたみたいに呼吸を荒くして心臓をマッハの速度で打ちまくって片膝をついてさりげなく仙ちゃんに寄りかかる。仙ちゃんは予想通りびっくりして、泣きそうな目で私の顔を覗き込む。

「五月ちゃん！ 志穂ちゃん大変！」

五月は状況から何が起こったのか瞬時に判断し、一秒だけ真剣な目になってからすぐいつも

の調子でひらひらと手を振った。

「大丈夫、緊張し過ぎると時々発作起こすんだわ」

「ぜんそく？」

「そんなとこ。仙ちゃんが抱きしめてあげればすぐ良くなるから、壊れ物みたく扱ってやって」

仙ちゃんの腕が不安気なまま肩に回される。それだけで八割方は治りました。

「志穂ちゃん、ほんとに平気？」

私は冷や汗流しながらにつこり笑ってちゃっかり仙ちゃんの手を握る。

「平気だよ。ていうか幸せ」

五月が声を立てずにくつくつと笑った。

そう言えば、私が仙ちゃんを好きになったのはいつだったろう。小学校は別々で、中学の時は一度も同じクラスにならなかったし、やっぱり高校からかしら。だけど中学の頃も結構仲が良くて、その頃から仙ちゃん仙ちゃんと五月に喚いていた気がする。それどころか小学生時代の記憶だってある。どういうことよ。学校合同で行事をしたこともなかったにも関わらず、十才の頃から既に童顔と呼ばれるショートカットの女の子と、私も五月も友達だった。そう考えると、五月に負けず劣らず縁の歴史は長い。とは言え、中学に入るまではレズっ気のある好きではなかった。

きつと二クラス合同でやったカエルの解剖実験が契機なんだと、最近思うようになった。何故かって言うと、いつもニコニコ笑ってばかりで喜怒哀楽の真ん中二つが抜けているみたいなの。仙ちゃんが泣いたから。そう、腹をかつ捌いたカエルに向かってひたすら謝りながら人目も憚らず泣いたのだ。その姿を見て思わず抱きしめた瞬間私のロケットブースターが点火して、それ以来仙ちゃんは私のお嫁さん。いつか仙田の仙じゃなくて千里の千で呼べるようになる日が来ることを、私はずっと密かに願っている。

ていうか本当は今でも心の中では千ちゃんって呼んでいるんだけど、あまりに照れくさくてカミングアウト出来ないだけ。

「そんで開けたはいいいけどどこから行きましょ」

「一番下からでしょ、シタシタ」

「あたし上からがいいな」

「仙ちゃんがそう言うなら上からでもいいな」

「じゃ、上からね」

「いやでもやっぱ下からでいいや」

「ええー」

「いやどつちよ」

そんな緊張感の欠片もない会話をしながら私達は校長机の引出しに手をかけた。今学校にいる唯一の人物はこの密室に監禁済みだし、もうやりたい放題だ。のんびり校長の弱みを見つけ出してやればいい。あればの話。

「一番下開けまーす」

五月の号令と共に最下段、一番厚みのある引出しがゆつくりと手前に引かれる。懐中電灯三つの光が当たる中、重々しい動きで現れてくる中身。ぎっしり詰まったそれらは校長という仕事の大変さを私達に見せつける。いくつかのボックスに整理されて、もしくは整理されずに詰められた書類とそのファイル達。隙間なく分厚い引出しを埋めるそれらは意味不明な圧力を、少なくとも私には送り込んでくる。

「どうしよこの書類。一応全部中身とか見てみる？」五月が困り気味の台詞を吐いた。

確かにそれは重大問題。もしかしたら校長は何かやましい物を仕事書類に紛れさせているかもしれないし、そうだとしたらそれを抜いてしまうのが一番手っ取り早い。だからって私達がそれを区別できるかどうかは分からない。むしろ区別できないといった方が正しいに違いな。しかも時間は限られている。警備員の意識が戻るまでに全てを済ませて学校を出なければならぬのに、全部の紙切れに目を通して余裕はないのだ。

「よし、とりあえずファイルの名前見て、変なのなければスルーってことで」

五月はほいと返事をして手前から順にファイルの名前をチェックし始める。それならとばかりに仙ちゃんが一番奥から。それじゃ私は真ん中辺りから。無駄なスペースを残さないよう徹底的に整理された文書のまとまり一つ一つに出来る限り神経を集中して、校長の弱点になりそうなタイトルを探して行く。

『PTA関連』

『学力試験方針』

『××教育財団』

どれもこれも、いかにも仕事絡みといった感じで私が望んでいたような物はない。五月と仙ちゃんの表情を窺ってみても成果は同じく皆無みだった。

続いて二段目の引出しを開ける。今度は書類じゃなくて書籍が並んでいた。これまた職務関係ですよと主張しているようなタイトルの本ばかりで、あまり興味を引かれない。一応間にか挟まってやしないかとバラバラめくってみただけど何もなし。あとは百均で売っているような黒鉛が一袋、半分くらい残っているだけだ。

「実はこの黒鉛に覚せい剤が詰まっていたり——」

「しないしない」

即座に五月が否定する。うん、私も本当はそう思う。

最後に一番上のと椅子に面したのを一気に引き出した。中からボールペンの転がるような音

が響いてくるのはもう気にしない。知ったことか。

で、結局ここにも獲物は見つからず、私達は五分も経たない内にファイルやら何やらを全部元の場所へと戻す羽目になる。封筒とか名刺とか名刺ファイルとか文房具とか何のけがれもない予定表とか、そんな物をいくつ盗まれたって校長は痛くも痒くもないんだから。

私は途方に暮れる。もう五月さん流荒らしで終わらせて帰るしかないだろうか。それはそれでいいのかもしれないけどやっぱり違う。違うと思う。違うに違いない。絶対違うよ。違うんだってば！

そう心で叫んでもう一度一番下の重い引出しを一気に引っ張り出したら中身の全てが明るみに晒されるのとはほぼ同時にレールの折れるような音がして、引出しの手前が机の端を軸にして絨毯の上にめり込んだ。書類の重さに耐えかねたみたい。

「あーらら」五月の間延びした声。「やっちゃったね。壊れてないといいけど」

五月は懐中電灯でジョイント部分の辺りを照らした。キャスターが片方外れている他は特に問題ないみたい。やれやれ。一つ安堵のため息をつく。

と、そこで私は違和感を覚えた。引出しがどこかおかしい。

「ねえ、この引出し変だ」

「そう？ 倒れてる以外は普通の引出しだと思うけど」

しかし何かがおかしいのだ。私の直感がまた頭を駆け巡っている。気付く、気付く、気付く！

「ねえねえ、上の引出しも開けてみようよ。比べられるかもしれないよー」仙ちゃんが耳元で囁いた。

それだ。私は急いで二段目の引出しを全開にする。今度は外れて落ちてしまわないよう、慎重に。そして違和感の正体に気付く。

「あ」

私の声に反応したのか五月も二つの引出しを見比べて、驚いたような素振りで軽く息をのんだ。

最下段の引出しは、上のと比べて奥行きが浅かった。

そうしている間に五月は大急ぎで懐中電灯を引出しの奥に向け、更に大量の息をのむ。仙ちゃんも光の先にある物を見てしゃっくりみたいな音を立て、慌てて両手で口を塞いだ。

「なになに。何あったの」私は二人に尋ねる。

「あー、志穂も見てみな。すごいよ」

私は五月に促されるまま奥を覗き込んで、思わずうわつと叫びそうになる。こりゃ仙ちゃんと五月が驚いたのも無理はない。

机の奥板にはガムテープで十字に貼り付けられた回転式の拳銃があったのだ。隣には同じように、透明プラスチックの箱がべったり貼られていて、中には黄銅色した五発の弾丸。そいつ

らはまるでずっと昔からそこに住んでいる双子のように、不自然なはずなのにそれを感じさせず、静かに呼吸も感じさせないまま鎮座していた。

「見つめちゃったねえ」まず五月が口を開いた。心無しか嬉しそうな口調だ。

「志穂ちゃん、これどうするのー」次いで仙ちゃんが私に問い掛ける。

私はここまでの流れから、既にどうするべきか理解している。証拠を残さずこの二つを持ち去ってどうにかしてしまえ。

と言ってもどうすればいいんだろう。私が持っていたらいつか見つかるかもしれないし、そうなら全てが明るみに出たうえ銃刀法違反で捕まってしまうに違いない。五月ならもしかすると誰にも見つからない隠し場所を考えてくれるかもしれないけど、そんな責任を負わせるのは嫌だからここは私が何とかしなければいけない。

そしてもう、時間もない。

「とりあえず持つてっちゃう。それからの事はその時になったら決めるから」

五月は小さく息を吐く。

「志穂はそう言うと思ってた」

「あたしも」

すっかりお見通しだよ。

そうして私達は出来るだけ大きい音を立てないように気をつけながらガムテープを剥がし、最初にプラスチックケース、それから拳銃を取り外した。私の心臓はその瞬間瞬間波打って、親指程の大きさしかない弾丸がケースの中を転げ回る音を聞きたび震えが走った。手袋の下は汗まみれで今にもケースを取り落としてしまいそう。本体を取り外した時にはその意外な重さにバランスを崩して仙ちゃんに抱きつかれて救われて、心拍が二重の効果で一気に上がった。

「だいたいよぶ？」

「たぶん」

それが終わると今度は引出しの復旧作業。書類満載でひたすら重い引出しを三人掛かりで持ち上げてレールに乗せてやる。私達はもう一言も言葉を発さず、黙々と作業をこなし続けた。

三人とも混乱していたのだ。原発を見学していたら燃料漏れを見つけてしまったみたいない気分だった。

何とか引出しを元に戻して五月が再び鍵をかけると、場の空気が一気にゆるんだ。

「さて」五月が一息ついて手を軽く打ち合わせて埃を落とす。「とにかく出よっか」

私と仙ちゃんは同時に頷いた。

五月の荷物をまとめて、警備員がまだ失神したままなのを確認してから目隠しになっていた仙ちゃんのタオルを取り戻す。拳銃とケースは五月が持ってきていた紙袋に放り込んで私の手に提げて、これで退却準備は全て完了。私は先頭に立って倒れたままの警備員の脇をすり抜けゆつくりと扉の鍵を開けて手前に引いた。

次の瞬間、私の心臓が凍り付いたように固まって頭から一気に血の気が引いた。

目の前に影が立っていた。しかも私より一回り大きい。かすかな月明かりで肩から腕や服の感じが見て取れて、そいつが男だと瞬時に理解する。

私は少ない脳細胞をフル回転させて状況を把握、対策を練る。とりあえず見えるのは一人、私より大きいけど体つきは並かそれ以下くらい、武器は持っていない。相手はおそらく私の姿にもとまどっている。それで反射的に手が出て来なかった。出会い頭はお互い様。で、私が扉を開けたところだから五月と二人掛かりで飛びかかれるスペースはまだ空いていない。悪いことには私と五月の間には仙ちゃんがいる。となれば、私がこいつをどうにかして押し返すしかない。

その時、私の頭に兄貴の感覚が入ってくる。いつだったか家で聞かされて、一度だけ使ってみた喧嘩の技を思い出す。そうだ、行け志穂。迷ってる前に叩け！

私は迷わず懐中電灯を男に向かって放り投げる。回転する光線に照らされてそいつが半歩下がって困惑するのが見えた。今だ！私は無警戒に開いたままの股間を思い切り蹴り上げる。狙いは違わず急に命中、敵は「おうっ」と情けない声を漏らしつつ両手で股間を押さえる。すかさずかみ込んだそいつの胸目がけてとどめの前蹴り。哀れ男は後ろによるめいてそのまま尻もちをついた。同時にそいつが遮っていた月光が私の所に飛び込んで来て、逃げ道が開いた事を告げる。

「行くよ！」

私は懐中電灯を拾い直して走り出そうとする。

というところで今度は横から髪をつかんで引き起こされた。痛い痛い痛い。私のボブカット！ 数少ない自慢の一つに何するの。

それよりも問題なのは仲間がいたことだ。必死に振り返るとワイヤー入りの窓ガラスをバツクに二つの大きな影がそびえ立っていた。最初の一人に気をとられて見つけれなかったのね。

私は人生初の嫌な痛みを上げそうになって、何とかギリギリで持ちこたえる。引っ張られてバランスが崩れて、二、三本か十本か髪が抜けたりちぎれて涙が出そうになる。

やばいどうしようやられるってパニックになりかけの頭に兄貴の説法がこえました。

「向こうのが人数多かったら即逃げろ。お前はやれて一人だから」

逃げられないよ兄貴。捕まっちゃった。五月のスタンガンは間に合うのかな。せめて仙ちゃんも逃がしてやらないと。でもどうやって。そうだ、私がもう一人に噛み付いて、二人が気をとられている間に脇から逃がせばいい。それしかない。ごめんね仙ちゃん巻き込んでやって。

そうして私が痛みをこらえながら三人目の腕に手を伸ばそうとしたまさにその時、校長室から小さな影が、信じられない速さで飛び出してきた。

「あーいい空気」大きく伸びをすると、湿っぽい夜風も気持ちいい。

「よく上手く行ったもんだわ」呆れ顔で五月が言う。

「でも楽しかったね」と仙ちゃん。意外と神経が太い。

私達は橋の真ん中にいた。真上を鋼鉄のアーチが、大きなカーブを描いて横切っている。何百メートルか向こうに校舎が見える。下は月光を歪めて反射する群青色の水面。

体育館でバカッフルに遭遇したりと色々ありはしたものの、あれから私達三人は何とかかんとか学校を脱出してここまで逃れてきたのだった。

「いやでも仙ちゃんいてくれて良かったよ。連れてきた甲斐あったなあ。私と志穂だけじゃやばかったもんね」

「ほんと良かった。ケガの功名ってやつか。仙ちゃんいい子だね」

仙ちゃんの照れくさそうな笑顔が街灯の明かりに映える。

「まさか仙ちゃんがフルコン空手の使い手とは！って感じだったけど」

そう。あの時、私が何とか仙ちゃんだけでも逃がそうと手を伸ばした瞬間、当の本人が暗がりから飛び出してきて私を捕まえている男の鳩尾に正拳突きを一発叩き込んだかと思うとすぐさま切れ味抜群の首チョップで追い討ちをかけて、秒殺してしまったのだ。

そしてその間に態勢を整えた五月がスタンガンの一撃で三人目をKOし、ついでに私が倒したのにもだめ押しを喰らわせて、私達はあの窮地を脱出した。まさに仙ちゃんの大手柄。この小さな空手家がいなかったら、もしかしたら本当に色々されて泣き寝入りだったかもしれない。

「二人には言ってなかったんだよねー。あたし、子供の頃からやっててちょっと強いんだよ」
ちよつとどころか。校長室での縮みっぷりはどこへ行ったのよ。

「だから最初に口押さえられた時も、志穂ちゃんって気付かなかったらやつちやつてたかもしれないんだよー。危なかったねえ」

「あつぶねー」ついつい口が滑る。訂正。「仙ちゃんに殺られるなら本望よ」

「えー。駄目だよ」

私と分かってくれたのは、愛が通じたのかな。結構嬉しい。いやすごく。

「それでジャージにフェイスタオルだったのか」五月が感慨深げにつぶやいた。なるほど。でも何だってあんなヤバそうな道をロードワークしていたのよ。てな事を後で訊いたらお婆ちゃんの実家があのだりにあって、一汗かいたらそのまま泊まりに行く予定だったらしい。

「そういや、どうすんのそれ。いい加減決めなきゃ危ないと思うんだけど」

「あー」すっかり存在を忘れていたのがバレバレな返事をして、私は手提げ袋の中を見る。四角く空いた口から入り込んだ月光を錆びた銃身が反射して、六連装のリボルバーは相変わらず古めかしい存在感を發揮している。弾丸が殆ど腐食していないのはケースに密封されたままだったからだと五月は適当に推測した。改めて見ると、恐ろしい代物を盗んでしまった後悔が

胃の辺りから這い上がって来る。

辺りに人がいないのを確かめてから、本体を取り出して眺めてみた。校長室でも感じた通り、外見よりずっと重いし手触りも全然シャープじゃなくて、正直さっさと捨ててしまいたくなる。それ以外どうしようもないと思う。

しばらく、三人輪になって戦利品を見下ろしていた。

校長室で『凍った時間』の住人達が姿を表したのは、もしかしたらこれをどうにかして欲しかったのかもしれない。これは半ば妄想だけど、多分、歴代の校長はみんな何かのアクシデントで引き出しの秘密を見つけてしまったんじゃないだろうか。そもそもってその事を上手く理解出来ないまま誰にも話せず自分の中にしまって、退任してからもずっと呪いから抜けられなかったとか。我ながら単純な推理。でも、私の頭でいくら考えても正解は見つけられないだろうし、この事に関しては五月だって同じだ。年代物の机と隠された拳銃と何かから逃げるみたいに分厚く塗り固められた校庭側の壁の関係を、何十年も経った今解明するなんて警察でも至難の業に違いない。だから私にとつての校長室はシンプルなままでいい。

弾丸が五発残っていたのは、一発だけ撃たれたことがあるという意味かもしれない。その一発がかつて壁ではなかった所を貫通したのかもしれない。撃った校長の写真だけが飾られていなかったのかもしれない。最悪、誰か死んだってこともある。今の校長もそんな考えを巡らせて校長室にいられなくなったのかな。だとしたら短絡的に罪を着せる訳にも行かなくなってくる。

結局の所、皆それなりに懸命に生きていて、それが上手く噛み合わなかった時に安田の事故だとか『凍った時間』に閉じ込められる死人とか校長の歪みが生まれてしまうのかもしれない。そして、その起爆剤が私達の持ち出した代物だったのだ。

「川に沈めちゃお」私は誰にともなく言う。二人が無言で頷いてくれる。

おそらく一度は何かに向けられた拳銃と、撃ち出されなかった五発の弾丸。その内、誰かに向けられる方だけを選んで思い切り振りかぶった。

どこかの誰かを恐がらせて、私の知らない校長先生達を縛り付けて、あまつさえ私を切れさせ混乱させた奴に容赦なんかしてやらない。五発の小物は自分じゃ何も出来ないし持っているもいい記念になるから許すとして、諸悪の根源だけは最悪な目に遭わせてやるのだ。

自分で言うのもなんだけどしなやかで力強く無駄のないオーバーフローから放たれたガラク夕は、お世辞にも美しいとは言えない放物線を描いて川のご真ん中に着水したかと思うとしばい水飛沫を上げてあつという間に沈んで行った。泡も立たない。ざまあみろ。

私の気持ちも察したのか、五月も仙ちゃんも顔が何だか穏やかだ。

「終わり。帰ろっか」

「弾の方はどうすんのよ」

「山分け」

「いらないつつの。余るし」

「残りは兄貴と安田にあげればいいじゃん」

「やっちゃん？　なんでなんで？」

「え、いやほら、見舞い見舞い」

「変なのー」仙ちゃんは笑顔で答える。

五月は自分の分をさっさと抜いて川に放り投げる。

小さな波紋が一瞬鮮やかに煌めき、私は校長への怒りが綺麗さっぱり消え去っていることに気付く。

明けて翌日、見舞いに行ったら安田はやたらと不機嫌だった。食事が不味くて医者と看護師が不親切で隣室の年寄りが夜通しうるさくてお風呂に入れないのがもう我慢出来ないとか再来週の月曜まで退院出来ないとか退院してもしばらく運動は禁止とか、世界に対する罵倒ノンストップ三十分。

「とにかく髪がべたついて堪らないのよ。我慢ならないわ」

端正な顔が酷薄な印象に見えて来るくらい三白眼を細めまくって右足のギプスを覗みつける、その剣幕があまりなもんだから、慰めるのもすっ飛ばして戦利品を差し出してしまった。

「これ、見舞い。レア物よ」

手の平に乗せられた真鍮小物を訝しげに眺めたあと、安田は黙って私に突っ返そうとする。

「何だよ取つといてよ。私とお揃いなんだから」

「あんたとお揃いでどうすればいいのかわからない」

酷いなこいつ。

「ほら、仙ちゃんや兄貴ともお揃いだし」

そう聞いた瞬間動きを止める安田。

「志郎くん？　あ、だったらもらっておくわ」

志郎くん？

唐突に機嫌が回復した安田を、今度は私が訝しがる番だ。

「あ、そうだよ。もうすぐ志郎くん来てくれるんだ」

「志郎くん？」

「あなたのお兄さんじゃない。忘れたの？　私が落ちた時も滅茶苦茶怒って落ち着かせるの大変だったんだから。まあその場でなだめたのは五月だけど、携帯に着信十件もあったわ。本当、困るよね」

何だそれ。

混乱している私を見て、安田は得意げな笑みを浮かべる。

「志穂は早生まれだから、義理の妹になるのかしら」

つまり兄貴と安田はあれなのか。私に隠れて何やってんだ。

「それで、悪いけど志郎くん来る前に帰ってくれない？ どうせ再来週にはまた学校でも会える訳だし」

ちよつと待てよ。

「ごめんなさいほんと」最早にこやかとさえ思える様相で、安田はきつぱり言い放った。「消えてちょうだい。真剣に」

私は促されるままに病室を出て、人気がない廊下で呆然と立ちすくんだ。兄貴が志郎くんや安田が志郎くんと付き合っていて邪魔つけない妹は空気が読んで席を外して土産を持って行く宛てもなし？ あんな苦労したの？ 自分の壁を一つ乗り越えたような気になれたの？ え？

あれ？ 世の中何一つままなりません？ 五月？ 仙ちゃん？

そんなハバナ。

ああああもうやってらんねえ校長も兄貴も安田も幽霊もみんな私の知らない所で勝手しやがって！

喉元まで出かかった叫び声を超音波に変えて磨き抜かれたリノリウムの床に手持ちの弾丸を叩き付けて爆竹みたいな音がして跳ね返った弾頭が蛍光灯を割って誰かが悲鳴を上げるのを聞きながら霧雨の降る外を目がけて駆け出して、その後どうなったのかは今でも知らない。知りたくもない。恐いし。